



【写真説明】1 画家と住民の交流を目的としたワークショップ／2 展覧会期間中、滞在画家による出張授業が中学校で毎年行われました／3 吹き抜けのロビーに飾られた幸田千依さんの作品「何時しかの夕暮れ」。2016年にこの企画中に制作

Chapter 1 目的

町民の皆さんにアートをより身近に感じてほしい—

これまで6人の画家が本町に住み、地域とふれあいながら制作してきました。この取り組みがもたらしたものは——。つなぎ美術館学芸員に聞きました。



「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」では毎年記録集を制作

町には空き家がたくさんあり、町民は「若い人が来てくれるとよかね」と言いながらも、なぜか空き家のまま。そこで美術館が借り受け、画家に滞在制作してもらう企画を考えました。

市町村の美術館は、その土地に縁がある芸術家やコレクターの作品を保存・公開するために設置されることが多いですが、本町にはそのような作品がありません。そのため、画家が滞在中に制作した作品の一部を美術館に収蔵。滞在中と個展開催中にはワークショップや中学校での授業などを行い、住民との縁を深めてもらいました。

滞在制作してもらう画家

は、後世に残せる価値のある作品を制作することはもちろん、本町での経験を生かし、さらなる飛躍をしてくれる人を選びました。制作に関するテーマは設けず、「津奈木に住み、滞在中に描きたいと思ったものを描く」ことだけをお願いしました。画家によって表現の手法や技法が違い、誰もが作品をみることで自分にはない発想にふれ、視野が広がる可能性があります。

関わる人が増えると町のファンが増える

この企画は手探りで始めましたが、皆さんと協力し合い、なんとか終わることができました。最初は空き家を貸し出してくれる人がなかなか見当たらず苦労しましたが、いろいろな人に相談していると、所有者が家族総出で空き家を掃除し、準備してくれました。展覧会などを通じて、多くの人が本町に足を運び、つなぎ美術館にも来てくれました。町に関わる人を増やすことが、町の魅力を伝えることにつながると思います。

大事にしている4つのこと

この企画で大事にしていることは「芸術性」と「地域性」、「話題性」、「娯楽性」の4つ。芸術性がないと美術館が行う意味がなくなります。そして、地域の情報や素材が盛り込めるか。そうしないと地域の人たちが見に来てくれません。足を運んでもらうためにはやはり地域性。話題性は、町の活動が外部で評価されると、皆さんのモチベーションにつながります。最後は娯楽性。画家が町に来ると、宴会が開かれたり、家に招いて料理をふるまったりする光景が見られます。この企画の活動外での関わりも、皆さんの楽しみになっているようです。

海外に視野を広げて

今後は海外に目を向けて、人材を受け入れていきたい。新型コロナウイルスの影響で時期は決まっていませんが、アートを通じた国際交流を本町で行いたいのです。

楠本智郎（つなぎ美術館学芸員）

【特集】アーティスト・イン・レジデンスつなぎ

アートは、まちと人をつなぐ

津奈木町に住み、描いた6人の作品が一堂に—

2014年からつなぎ美術館が始まった「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」。これは、アートによるまちづくりと同館のコレクションを充実させるため、毎年1人の画家が町内に滞在し制作活動を行い、同館で個展を開く企画で、6年間にわたり取り組みました。ことし12月からは、過去に滞在した画家6人の作品を展示する、「アーティスト・イン・レジデンスつなぎの軌跡—つなぎだヨ！全員集合—」を開催します。画家の作品へのこだわりやそれぞれの思い、アートにふれた住民の気持ちを聞きました。

